エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２５７号

2023 年 9 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三

電話　080-1232－0905

http://encounter.agape.wjg.jp

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より（２）

十字架と復活がパウロの一枚看板

パウロの主張は神の恵みに尽きています。また、神の恵みということは、これは具体的に言えばイエス・キリスト。パウロの中心思想は、キリストです。もっと具体的に言えば、十字架と復活であります。パウロは、コリント前書で、「自分は十字架につかれ給いしキリストのほかには何事も語ろうとはしない」と言いました。十字架の贖いは復活によって成就したのですから、復活と言っても良い。十字架と復活がパウロの一枚看板であります。この信仰の客体である十字架と復活は、我々には信じにくい。イエスが山上の垂訓において、「真の命に至る道は、狭く、細い、これを見出す人は少ない」と言われました。この十字架の福音から、離れようとしつつあるのは、それを教えた偽教師も悪いが、人間には、そういうものを信じない、あるいは信じても、それから離れるという傾向にある。パウロはそれを責めているわけであります。

ユダヤの教師たちは福音を理解できなかった

ユダヤの教師たちは福音を理解できませんでした。そうですから、律法を持ち出しました。即ち、旧約の律法を行なう者は祝福される、という神の原理、これは間違いではないが、それを持ち出しました。そして、それは福音ではないと言いました。パウロは、これは旧約であって、福音ではないと言いました。これは私の福音を乱すものであると。彼らは、律法のみ、あるいは、十字架の福音に更に律法をプラスすると言ったかもしれません。何かを加えると重みが増えるように見えますけれども、パウロは加えることによって福音の意味が無くなると言いました。福音の意味が壊れる、と言いました。本当に人を救うことにならないと言いました。

最も危険なプラスは、当時のユダヤ人にとっては律法でしたが、現代人では、我々の信仰を加えることであります。のちほどガラテヤ書で詳しく学びますが、十字架だけでは不十分であり、これに、我々の信仰が必要である、これが、我々の信ずべき客体である、と考えることであります。これが、我々にとって最も難しい問題であります。

多くの人が初めに十字架で躓き、第2に信仰で躓く

何回も言うように肺結核の病原菌を殺すのは、ストレプトマイシンに含まれているのです。それに加えるべき something はありません。これを飲みさえすれば結核は治ります。何を飲むかと言えば、ストレプトマイシンだけであります。ストレプトマイシンに加えて、飲むということを飲むわけではありません。飲むという言葉が二つ重なると不可能になります。難しくなります。これは大事なことです。

「信仰によって救われる」最後はこれによってひっかかります。自分に信仰がない、と。歳をとって、謙遜にそう言う信者は多い。しかし、我々は自分の信仰で救われるのではありません。ストレプトマイシン、即ち十字架で救われるのであります。ガラテヤ書を通して、このことをしっかり学んでもらいたい。多くの人がここで躓きます。初めに十字架で躓き、第2に信仰で躓く。この点については、また、1971年のロマ書の研究の時にはっきり申し上げたいと思います。

第3講、第1の感想―信仰の客体はイエスの十字架と復活―

パウロはこれほど真剣に、初めから信者の生活の根本である信仰の問題、何を信じるかという問題について強く述べました。私は、何を信じるかというこの根本問題について、現代のクリスチャンは生ぬるいと思います。はっきりしておりません。その点については、新興宗教の信者を真似たいという思いがします。彼らは間違いかも知れませんが、これを本当のものと信じると言う確信を持っています。現在のクリスチャンが無力であるのは、信仰の客体をしっかり持っていないためです。ぼやっとしています。私はこの点で新興宗教に敬意を持っています。しかし、その信仰の客体が間違っている。健康がよくなる、金が儲かることなどを目的にして、信仰の客体を関連付けているので、信じやすいようにして、信仰の客体というものが真ならざるものであるために、混乱が起こっていると思います。おそらく100年200年も経てば、その審判が下る事でしょう。新興宗教の客体が間違っていたとすれば、きっと裁きを受けることでしょう。パウロの言う信仰の客体はイエスの十字架と復活でありますが、これがまた、3章、4章で展開されてきます。

第3講、第2の感想――歎異抄とガラテヤ書の類似点

もし、ユダヤ教がこういう教えであると言うのであれば、パウロは憤慨しなかったでしょう。しかし、これがキリストの福音であると言ったので憤慨しました。キリストの福音とそうでないものとをどうして区別するか、私は、このガラテヤ書で分かると思います。その点において、キリスト教と仏教浄土門とはよく似ていると私は思います。有名な歎異抄について、これは異端を嘆ずる書、親鸞聖人の口伝と違ったところの信仰を述べており、遺憾なことであると書いてありますが、この趣旨はガラテヤ書とよく似ていると思います。中心問題について論じておりますから。ですから、浄土門の精神を判断するには、大体歎異抄をもって理解すればよい。他の信仰であればよろしいが、浄土宗の信心と称して、歎異抄に不要なことを言ったとすれば、それは異端になります。歎異抄で決めたらよろしい。

私は、福音の信心についてはこのガラテヤ書で判断したらよいと思います。歎異抄とガラテヤ書（149節からなる）と比べるとその長さは大体一致しています。そしてまた、本当に我々がこのガラテヤ書の信仰と一致しなければ、パウロの行ったところには行けません。我々にパウロのような人格は現れて来ません。信心が同じでなければ、その行いも出て来ません。現在クリスチャンが無力であることは、このガラテヤ書の信仰が分かっていない証拠であります。我々は、謙遜になってガラテヤ書の信仰を学ぶ必要があります。…

第3講、第2、第3の感想――「汝らは世の光、地の塩」

親鸞は最初に、私の信心は法然上人と同じである、と言いました。そうしたら、他の弟子たちが文句を言いました。親鸞は図々しいと。先生の信心と同じとはけしからんと言いました。法然上人はこれを聞いて、「同じことを聞いた者であるから、同じところに行く」と言われたそうであります。我々もパウロと同じ信仰にならなければ、パウロのような人格は出てきません。

私はイエスが「生命（いのち）に至る道は狭くて細い。これを見出す人は少ない。」と言われたことを思い出します。これはイエスの時代のみならず、現在においても、未来においても同じです。人間というものは、そもそも自己中心的なものです。人間が偉いと思うことは、聖書の教えと違います。聖書は、大胆にも人間は罪人である、と公言しています。自分は罪人であると言うことがはっきり分かるまでは、聖書の真理は移って来ないと思います。私は現在の教会に福音が無いと信じます。福音はそうたやすく信じられるものではありません。賢い者は多いが、信じる者は少ない。我々は幸い、この教えに接しました。どうぞ我々はこの教えを信じる事が出来て、本当にパウロのような人格を見せてもらいたい。イエスは、「汝らは世の光、地の塩」と言われた。本当にそのような人が出なければならない。人の欠乏です。このガラテヤ書の信心が無いということの最も大きな証拠は、本当にそのような人がいないということであります。

ガラテヤ書をもって、福音を体感することができる

ガラテヤ書は 6 章からなっておりまして、第 1，2 章はパウロの使途職の弁明であります。自分の使徒職は、人からではない、神から直接受けたものであることを弁明しました。これは裏を返せば、パウロの述べる福音の性質を述べている箇所であります。次に第 3，4 章は、その福音の内容を述べており、また、最後の第 5，6 章で、その福音の人生に及ぼす効果を述べております。誠に、ガラテヤ書をもって、福音を体感することができるのであります。ガラテヤ書を知らずして、キリスト教の福音は論ずべからざるものであります。

私は幸いに、過去 5 年にわたりまして、ロマ書、コリント前書及び後書、この三つの書簡によりまして、60 歳を過ぎて、毎日曜、第 2、第 4 日曜を除き、パウロ先生から直接この福音を学びまして、ほぼ福音の意義を解することが出来ました。これは実に、人間の知恵に寄らず、神によって伝えられた福音でありまして、我々はこの福音を理解することによって、これを信ずることにより、真に人間の自由と、人間の尊厳、人間の尊さを知るのであります。5 年間にわたって学びましたものを一つの書に現した書がこのガラテヤ書であると言うことができます。

ダマスコ途上において、復活のイエスがパウロに語りかけた

「兄弟達よ。あなたがたにはっきり言っておく。私が宣べ伝えた福音は人間によるものではない。わたしはそれを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示に寄ったのである。（コリントⅡ 1.11, 12）

わたしは人間から教えられたのではなく、ただイエス・キリストの啓示に寄ったものであると言いました。…大体パウロは、全体的には、神がイエス・キリストを通して表わして下さった、と言っております。目的格として解釈するのが本当かも知れません。ルッターは、イエス・キリストが直接パウロに示したと訳しています。どちらでもよいでしょう。即ち、復活のキリストを媒体として、啓示されたというのであります。ダマスコ途上において、復活のイエスがパウロに語りかけました。誠にこの記事というものは、実にパウロの生涯を貫いたのみならず、キリスト教 2000 年の歴史を貫いている出来事です。これは、パウロ研究、努力によって、自分で得たものではありません。イエス・キリストから受けたものであります。福音とはそういうものです。パウロが研究・努力によって到達したものではない。イエス・キリストから聞いて得たものです。これが福音の受け方であります。これはパウロに限りません。すべての信者はこうして受けるのです。

第１の感想―基督は救い主、神の子。クリスチャンの元祖はパウロ

キリストとクリスチャンとは違うと言うことです。キリストは救い主、神の子です。クリスチャンの始まり、即ち、元祖はパウロです。パウロの福音を学ばずしてキリスト教を論じてはなりません。それは間違いであります。

第 2 の感想――真にパウロの説く福音を自分のものとして、世に勝ち、己に克ち、本当に地の塩、世の光となろう

内村先生は、27，8 歳のころ、米国で福音に接し、10 数年全国各地を流浪され、その後 40 歳から福音伝道に従事されました。57 歳ぐらいの時に、中央に出られて伝道されました。そして 60 歳近く（1920 年）になって、有名なロマ書の講義をなさいました。ロマ書の序文の中に、「自分は過去 60 年、伝道をしたかったが、その機会は無かった。自分は伝道する機会なしに生涯を終わるかと思っていた。しかし神は、所を与え給うた。そして、この大手町において、福音を伝道することができることは誠に感謝に堪えない。」と書いておられます。先生は、28 歳ぐらいから 57，8 歳までの約 30 年間が砂漠時代と見える。この 30 年の間に、神によって十分に福音を訓練されました。一人娘を取られ、この砂漠の生活を終えて、いよいよ大手町で大正 7 年から約 5 年間にわたって、福音を伝道されたのであります。

モーセは、40 歳から 40 年間の砂漠時代を経て、80 歳から民族を引き出す仕事を始めました。聖書に 40 年とはっきり書いてあります。パウロの荒野時代は、アラビヤで 3 年、シリヤ・キリキヤで 14 年、合計 17 年、約 20 年間でした。その間にパウロは十分に福音の真理を神から教えられました。彼は 50 歳から大伝道を始めました。

パウロや内村先生でも、福音を理解するのに、これだけの年月がかかってい

ます。我々は、5 年や 6 年で、福音の深い意義が分かるわけがありません。終生、我々は辛抱して福音に取り組んで、真にパウロの説く福音を自分のものとして、真に世に勝ち、己に克ち、本当に地の塩、世の光となる、そういう人がこの教会から出ることを祈ります。